

四季句集

全

宝曆五年 乙亥
1755





溪嶽下

吳山



乙亥歲旦

明々々々々々々々々々

つと志海小海り

小海の指と茶味

書意城

印々々々

書抄見や雪と先見

鳥跡

寸長

氷の字に

徹く筆や日世々々

周東



和歌集

硯ハも委ねぬめらひぬて
波立の舟の海の前はこゝに
春のきり紙も又由連ハ

柳花房

蓬萊や硯の海も浦はき 吟雨

紙のわくたる富きれ家よ
志ひ委ねぬにわく婢茶
凡雅の言ふを雲形の露を
たよりむれ中にもつきの
たあらある言ふく物も如
ゆきふ来連ハ

西湖堂

紙の志れり建もゆり 志乃妻 蘆中

雪を日ぬにいと海なれや
笠故手ぬ日ハ花工も影ハ
かさよと海夜は月に唄て
いつとつ詞人の友あつらん

鹽海菴

今もも法なきぬ連や晴り 夜白

筆書ハ松空の名に呼ばて
幾十うえりけ春あまも
立ゆく氏共慶つ紙ハ
よりすまふりの書ハ漏れ
添えて久ハ多紙を色を
巻ハ

練丹洞

弓玉やうらハゆく 春良中煙 風

商山下
龜玉画



題以五波

喜もは

花のいろはや

福寿州

文吉子己白

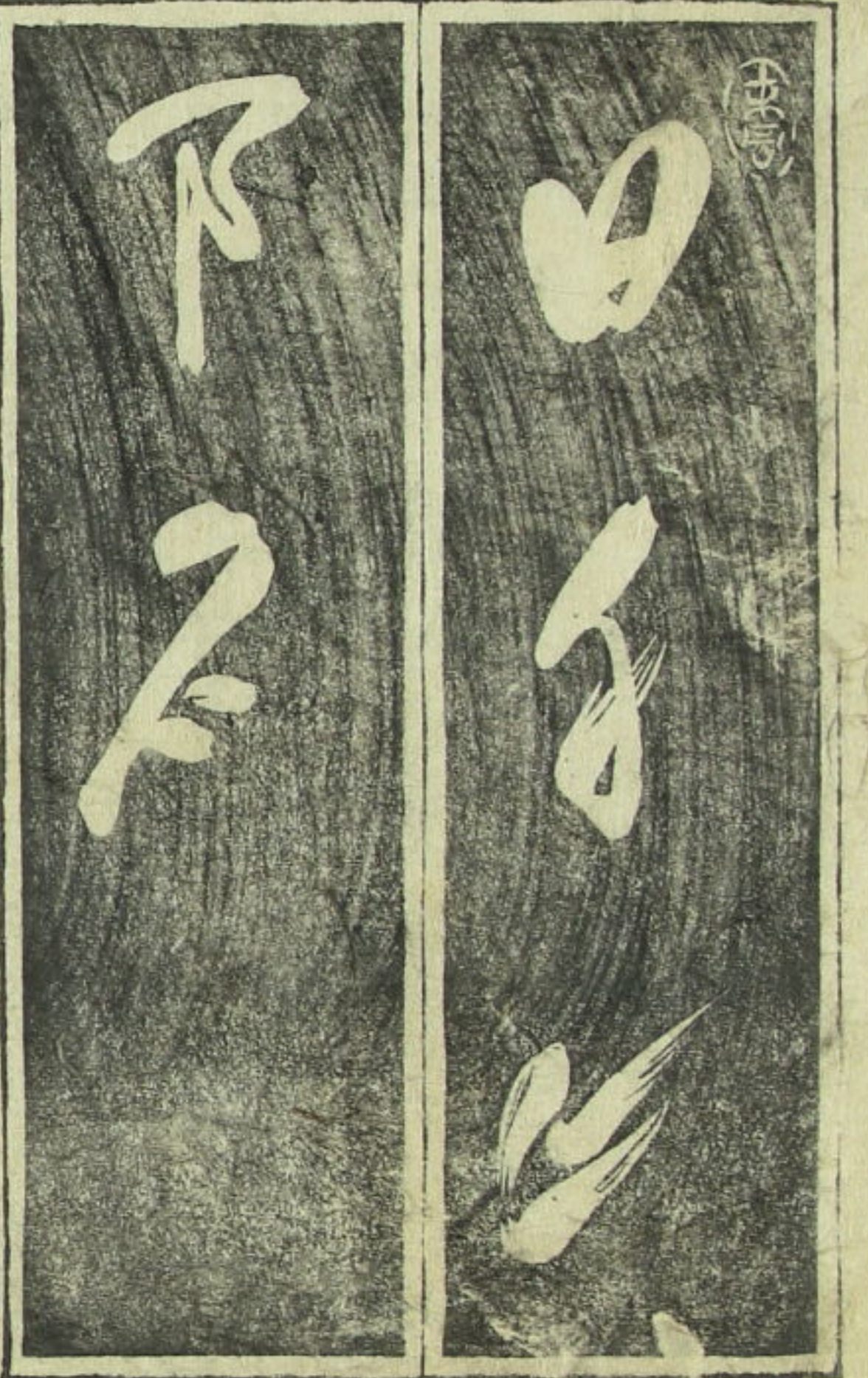
題庭訓性来

清涼正子貴方也

里月を

一巻巻涼弄





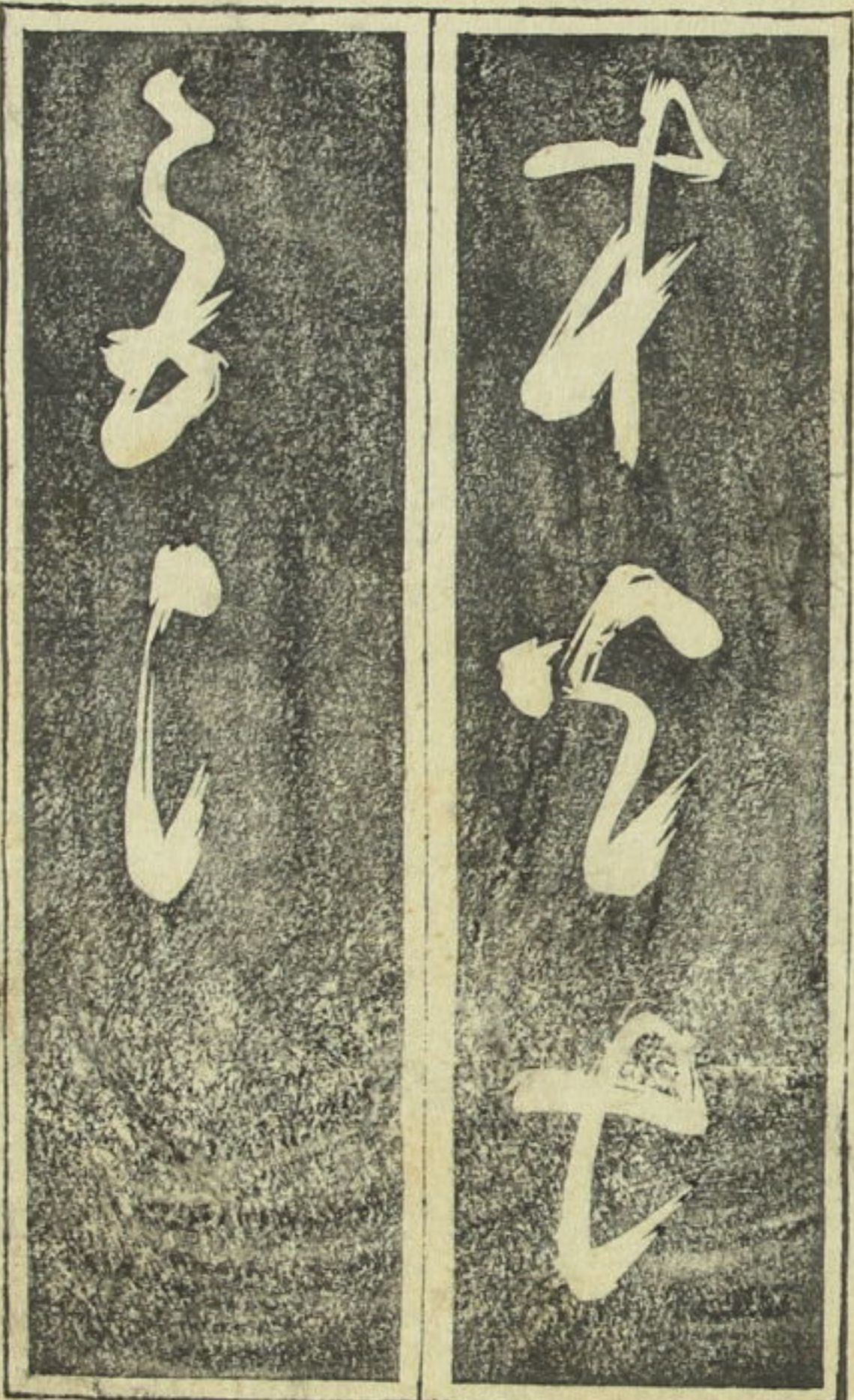
うらみ次も羨まうか 詩神 寸葉

月ハ松舟子ゆきまわりの云 其川

山くもん 破りや 蘇北を待 李潭

里芋北子其山 蘇小 雅意哉 宜考

搗栗のみ 蘇も 雲一 席う名 楚玉



木くは 木下 木下 木下 古里

日の影北 木下 木下 木下 午溪

木下 木下 木下 木下 仁昭

子金 木下 木下 木下 里佳

水 木下 木下 木下 紫園

詭梅也

又少好小也君之也

古類
今川状

百練觀
鯉尺



歌

子習状



硯墨かみ習

極く初日哉

初より序夜風

下女心
力子

人の氣も伸あうり危直音松 芥水
 元日や廿もすねる小差原 松調
 中阿笑くあ陰の系や日此始 仙州
 一陽若ちうくや落うて初日の出 歌別
 子神や足少方梅の身行り 桂路

世に子
包石

蓮葉の種中や雪此去りけ来 日光 伽山
 若水にうめ衣紋や豆杞と 文羅
 喰津之もみ穀坊や云種う湯 古淵
 食篇ふ先りとてくちかみ豚 乙武
 名に歌ぬ水も原蓮あり初日歌 蓮葉



蠍
目本

張
一

張
爾

張
款

川
環也

如
字

如
字

同
洞

李
冠
画

天
地
也

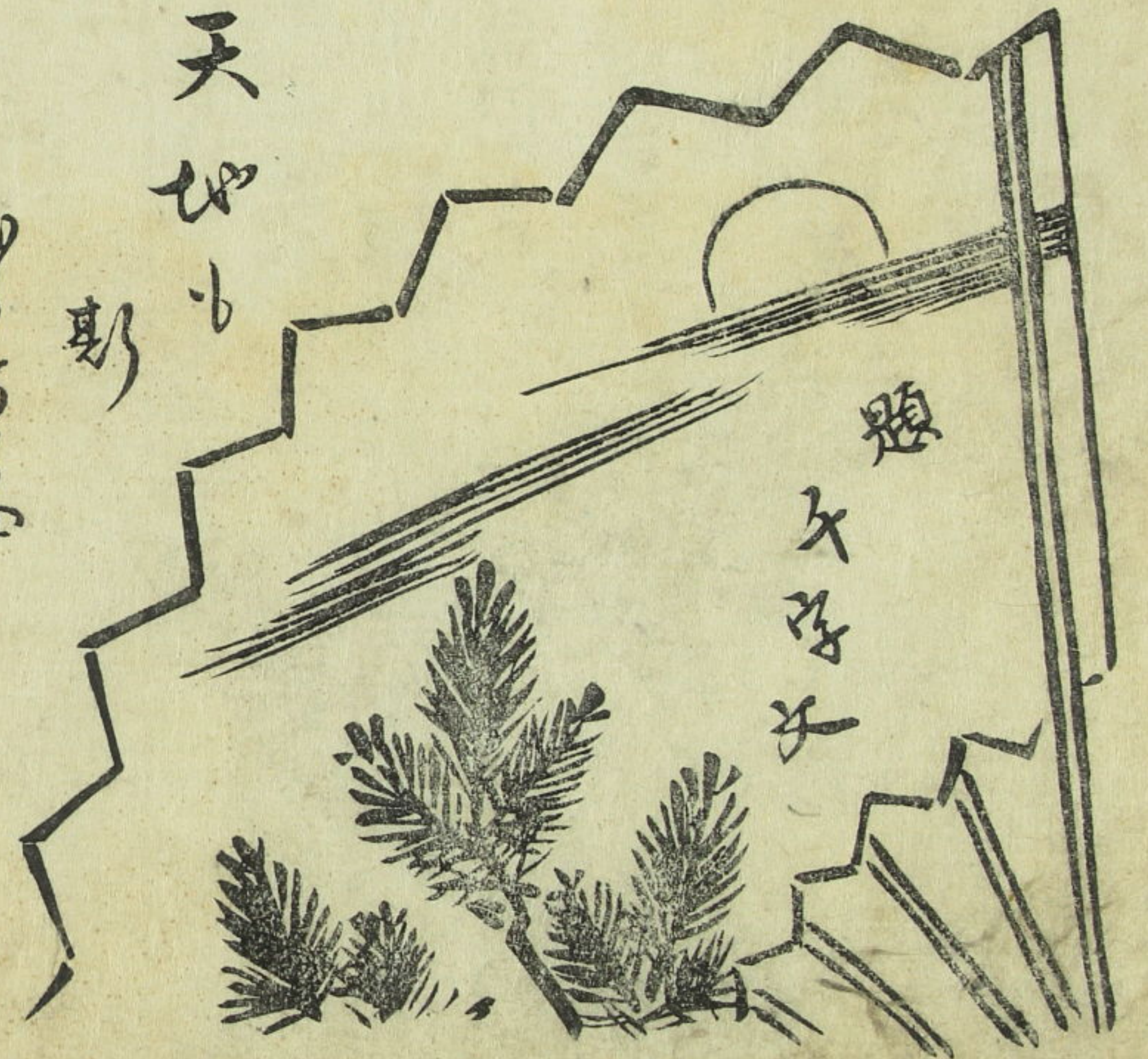
期

如
字
也

茶
話
集
焉

自
画

自
画



題

天
地
也

うそく

子木

持ててあふりい代家子代のま 千里

石子多しおち続てありてと酒煮 奉調改 八十磨

抄や日れおみうと玉お煮 和泉

公孫いふとさや合まて室船 笹長

張る海日のちめり清し車井戸 市楓

目

才

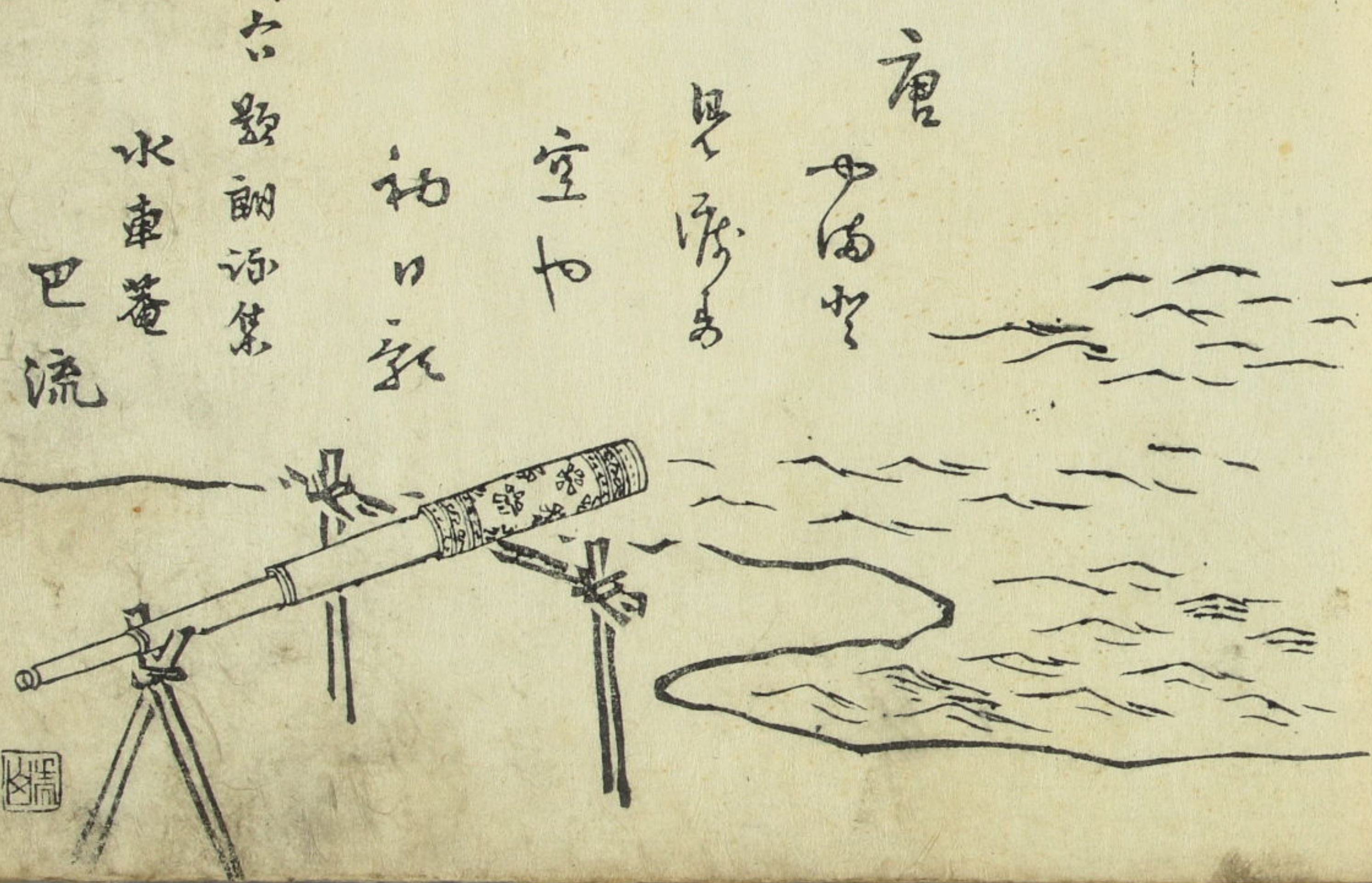
箏目此満お抄一 家若甚 何調

管と口法おとせと多し度小 家琉

妻とまお耳うと明とあふさ愛 家律

子全成と多きぬと八所一玉の共 風光

高方とと踏むやお乃口抄子 梅雨



巴流

水車菴

台題詞詠集

初日歌

空也

見海鳥

中浦也

唐

蓬萊や

貢うま

四

芳叶堂

三貫

歌
園在抄



半流不滞より清しとありて水

吟長

馬も致しやあ方以て是を

寸艸

古を史に寄る感皆也虎冠

芭長

纏泊の音を角引し悉く

楓夕

傍ツリまを引くもと梅子よ神廟

吳山

七亀甲

七之入

玉虫此色と照るや初夏半目

里山

海りに魚も躍るや夕日の出

幸喬

喰はるも貝拾ひしと浪り枕

徐來

ぬるまのそよも形一明若春

林郷

玄波やうもり居れば幾く

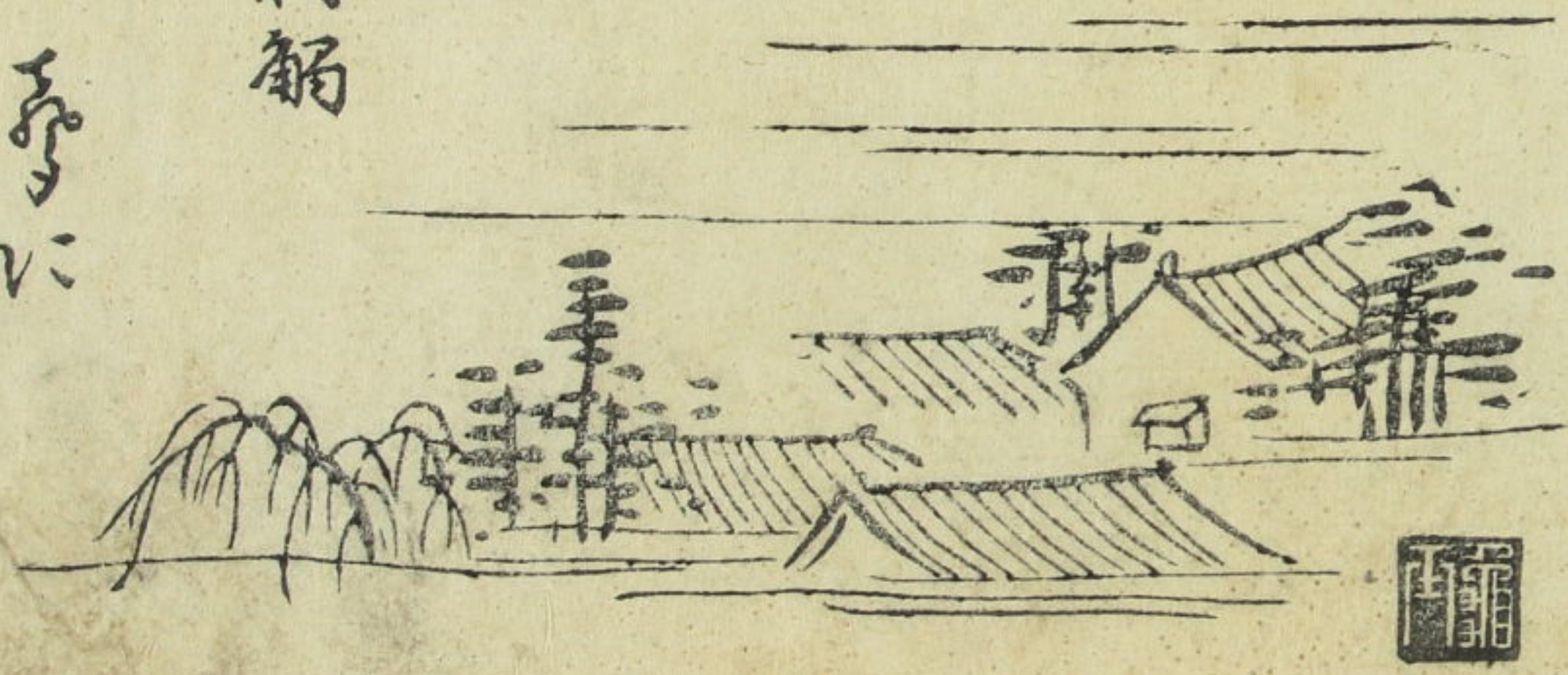
梅里改
菊羽

才門新やハ系に

類富士山狩觸

明あるハケ園

多和橋孝長



善決

下穀尔

歌

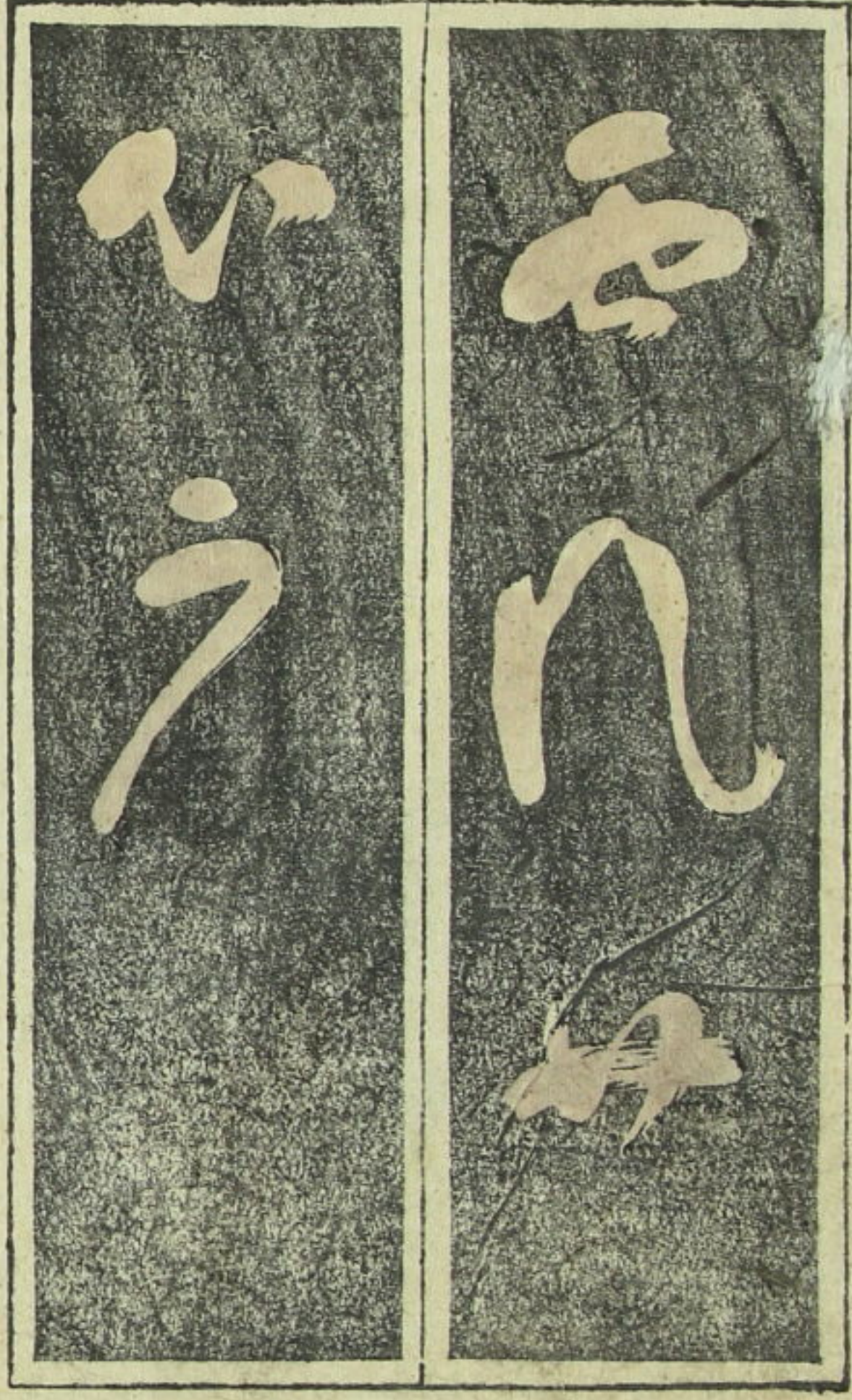
書之免此

字や

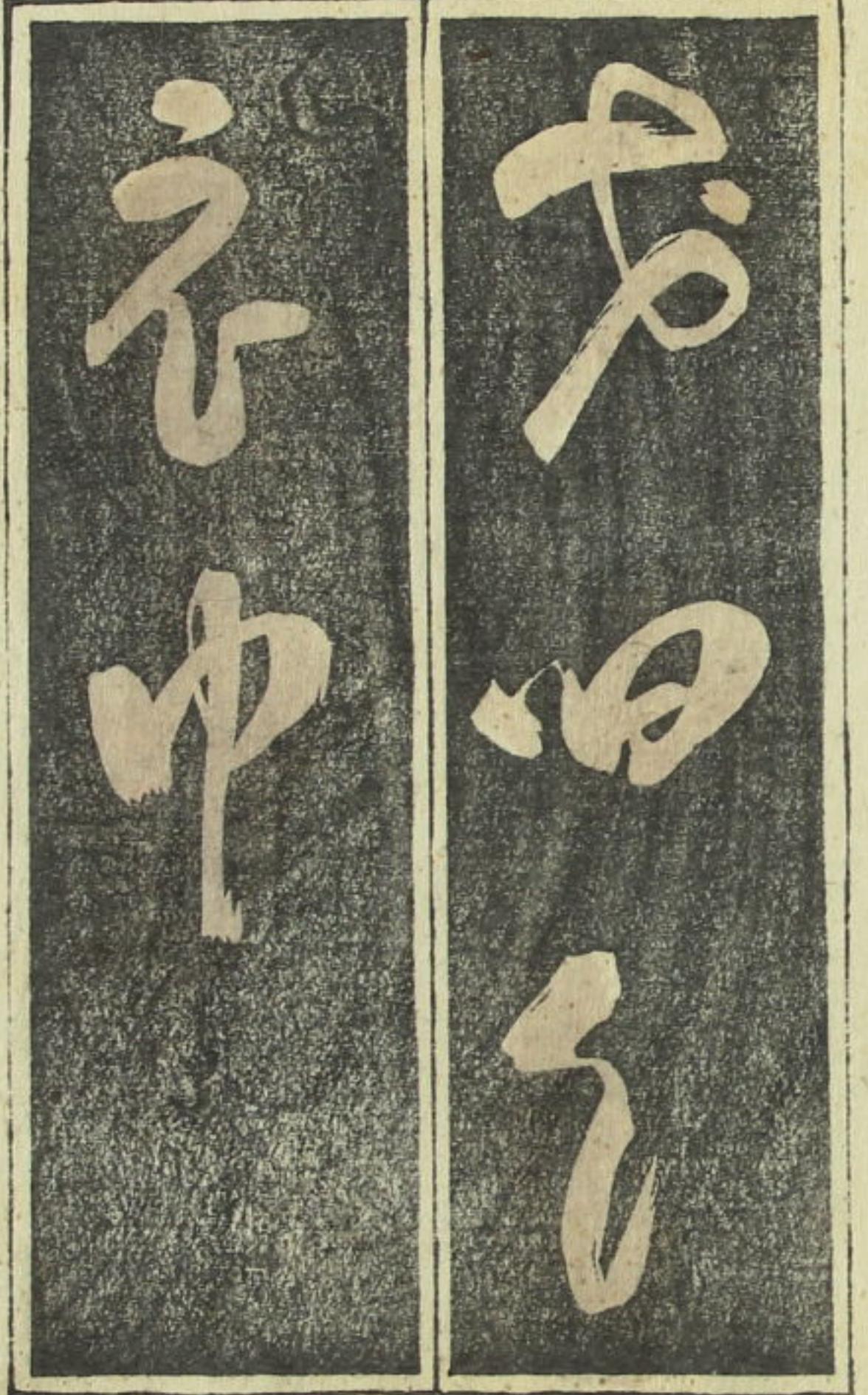
百了の心み御

下葉舎里物

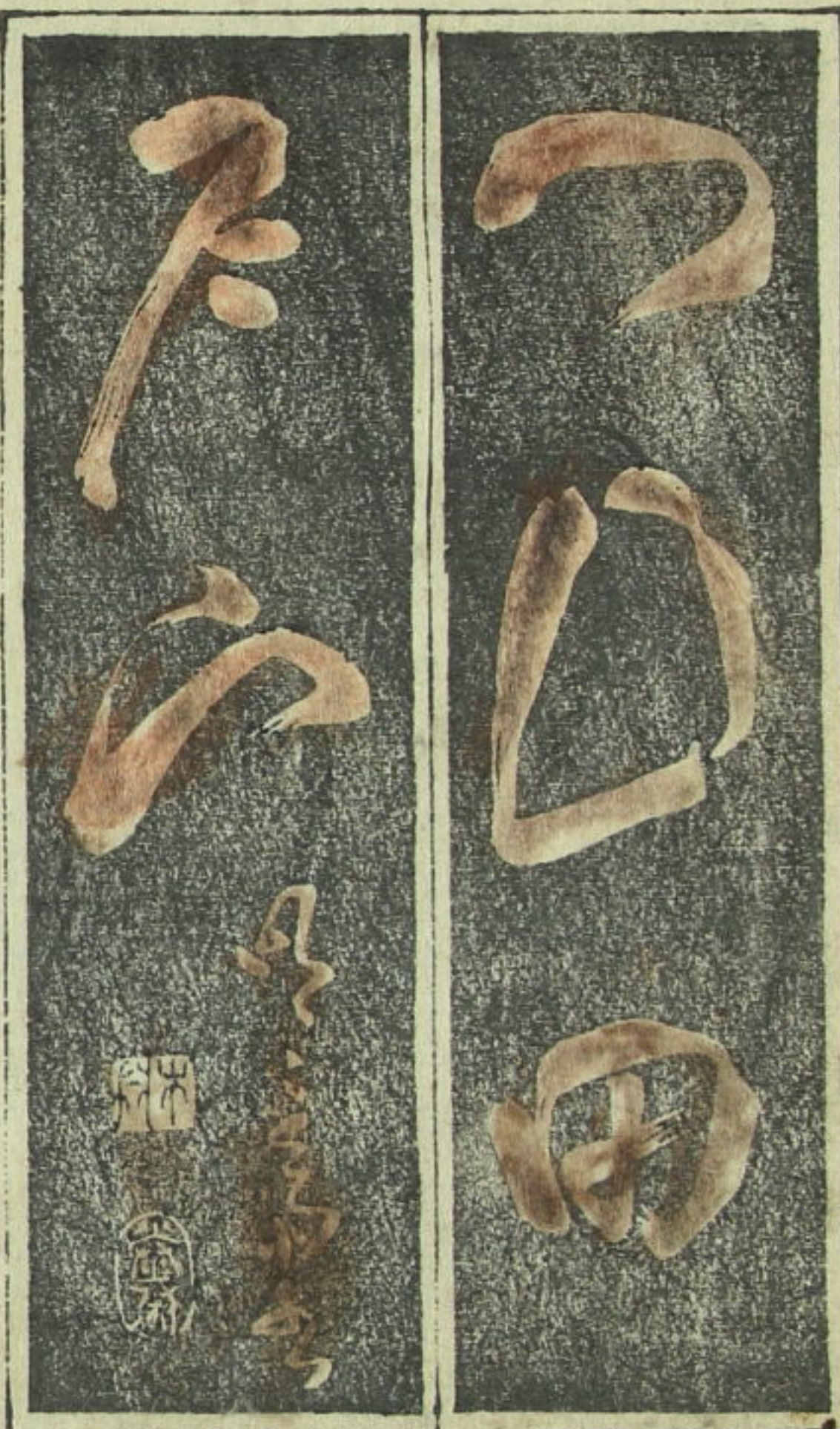




掃り垢々十雨の陽や水代は雲 百株
大川や水邊中に和々風魚 瑞芝
若菜や人も若やくやしの乳 杉史
竹もとの七日は雲や雲乃春 午長
車もあも麻のたよ人も誇り 吉雨



衣賣の囀もや多は活代の雲 呂長
白もよふ松子めそふり大川口歌 花長
糸ゆふのちりや朝のかり渡 歌長
衣初は山も帯や初らそみ 露葉
巾着此歌を伸りぬの春 芦帆



常のたまき水交や門は梅 文賀
 若歳や園くく他をいし秋 挑我
 田つらりや浅万石の日記裏 秋里
 天の産もぬれ子宿一宗は春 千枝
 うらひあはれうの字もあや梅の春 如秋



松舟も志し庵を先や門鏡 花紅
醉月城



すへらるる柳の髪や忍びる春 琴夕



包井も到く宿あり梅は春 柳夕



寸長画

正朝 序次混同

梅の色彩より山まや唐酒 仙花

万歳は夏よりや舞の神 寸化

心物等にけりし唐の物 菊丸

蓮園やりてし花は穂子竹 寸松

富士より雪の衣はや夏 菊色

ふしは花ひ緒より山口 凡里

山雪や麻と下れ衣はけり 凡岳

まうなる新茶やや鏡もも 古柳

雪の跡はけりや山はけり 森秋

一夜あけて山も雪や玉の雲 市丸

かりそぬ雪より初日よしの松 森貴

かりそぬ雪もあつた山の雲 時化

ひと山より雪より梅や山替 冬松

梅の帯やうや扇は初雪を 釣雪

神垣乃掃地や松雲より新 蟬有

綿より海老は端よりその雲 洗石

柳や草花を山より朝日より 固春

河もかきや山も麓のまや唐 梧夕

虫初やあ海よりけり草花は 柑秀

茶物の崩よりめや初雪は出 雲盧

多代は雲をとりし伸し唐 著隣

鶯の羽より折し出たり唐 其石

折るより故実よりけり神の雲 更互



甚い山かきふ

物もあゆみ哉

世翠門 書 郊

山も空も空ひゆりりて川流 希声

春日新法はてめら酒や茶酒 花昔

山笑ふ山もむらて咲良く如 花調

あふりて空くや梅はて川流 鶯枝

玉もやゆも嬉し杖集 龜水

喰つての種も解るや礼分浪 桃枝

舌打てと鈴を流す山椒酒 青眼

木も水も礼と観くや名水の香 兔流

あつ玉と産物もと鈴は初日分 桃枝

杉竹と咲や朔日つ毒の香 桂之

鶯の挿しやゆきまきと始 玉芳

漱藻はもも遊りもて川り哉 素牛

飯草つ河原もゆりや勝海老 玄麻

川松の夫婦やまなんで古知月 百志

えりやゆりく鹿も梅の風 午山

唐麩酒も笑ひ初るや飯上戸 長翠

鶯の背中にゆり初る如 悟淵

あしきやうな物なまを連ふ

養子やあか新——玉の春

共眠

さかねも赤いのきく徳作書

互桂

赤雲八日女よりと茶の奥

夢由

すこやね色のちやかたり松

五葉

管けきりひらふまて物見

家遊

茶子成上危のまやうさし雲

九草

うり連珠ふあやあや花の雲

古渡

ゆくと御膳のまの油り

三扇

まうらひ由老や雲るまの雲

鎌長

松舟此のまや山かん傍由

高長

大紋の袖にまきまの口のわ

私囚

双ふをゆふの物まねはた雲

長谷

あし物花のまきまのわ福雲州

常流

うけ網のいせも久しや扇の雲

芦江

ふゆやうに花もまのわ花や雲

長長

いし舟にまや茶まねたう松

巴十

松竹や雪の梅松をまきまのわ

柳雪

まをまて寝く扇や雲の雲

山貢

月をま梅好好まきまのわ

巴東

初まねをぬいし山の梅

甫丈

山松ま戸の如雲や四方雲

雨考

雲雲子雲の山遠山

同

川燈よ二日雲れ謎うけり

百草

春雨
 春風
 春草
 春水
 春山
 春樹
 春鳥
 春花
 春月
 春雪
 春雲
 春霞
 春霧
 春露
 春霜
 春冰
 春雪
 春雲
 春霞
 春霧
 春露
 春霜
 春冰

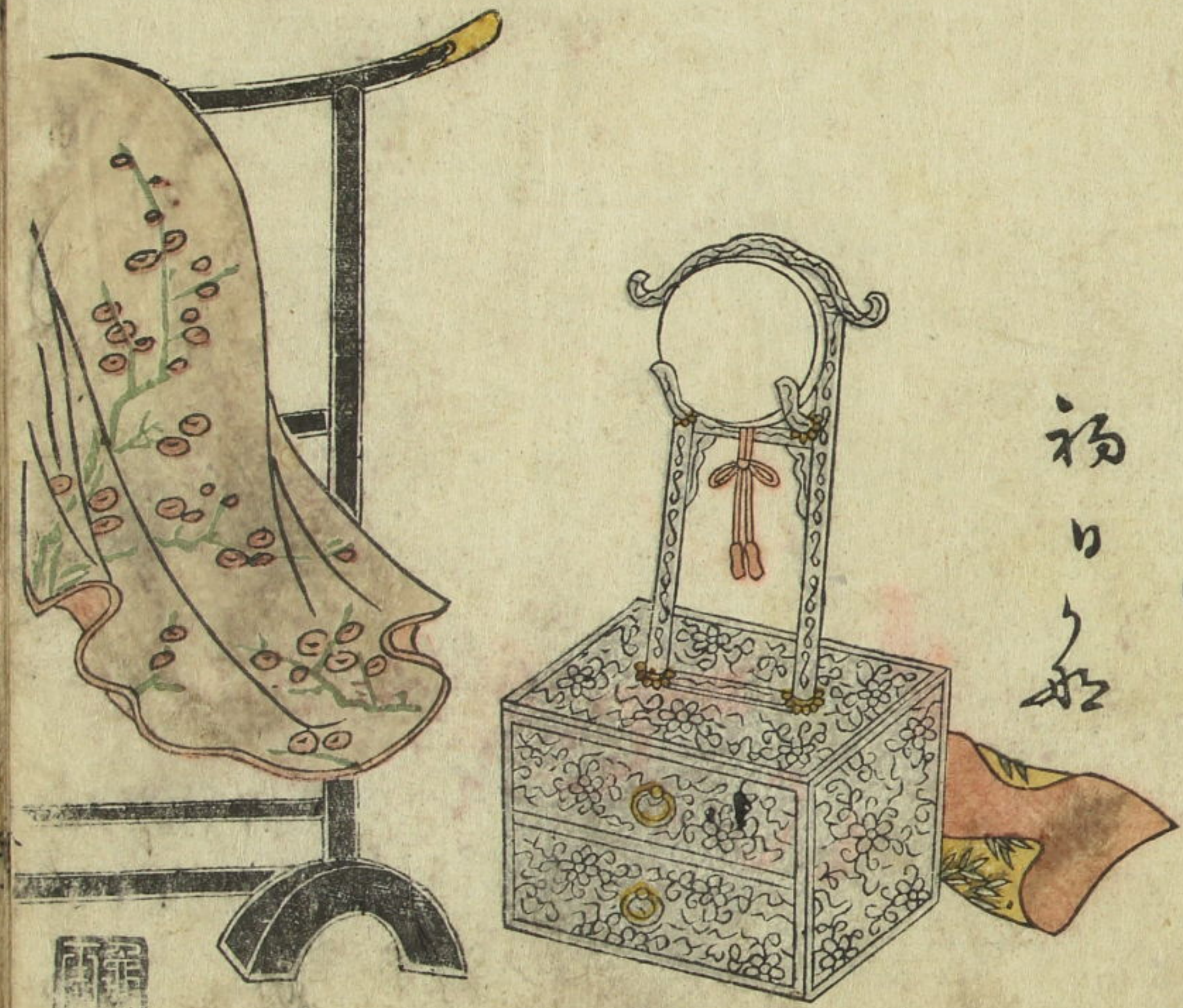
春興 人日

門琴
 慎車
 舟花
 私四
 旭磨



梅香園 山路

羨筋
 春見
 柳川



去月の世
 初り如
 似て

無磨
 云地



ハカヤ

月あそ

不あそ

さし

り歌



弄月館文東



歳蘭 玉吟歌集

梅の香も遠子いと来や春の来 花紅

いとくは野をよきれ梅

香遠もきくぬ里やとく言 花

華の葉の霞物波や春の言 寸化

吸筒も細の言花や年花波 葉丸

新より花裡れそみ花とく言 寸松

光琳の梅も咲りりやとく言 菊色

川の花をよきれとく言 古あみ 万里

麻と遠く山とく言 古柳

塩わの古あみや花とく言 古柳

降葉も雪と雨とく言 市

川もや市此面もやり言 市

いと花もよきめのおれや梅柳 舟花

ら花も川いと花も花とく言 百志

来ちく花の果や大みとく言 冬松

花も身と迎るゆや年本想 紫石

茶喰の口も乾く花とく言 基笠

川もや花も花とく言 梅花言 咲牛

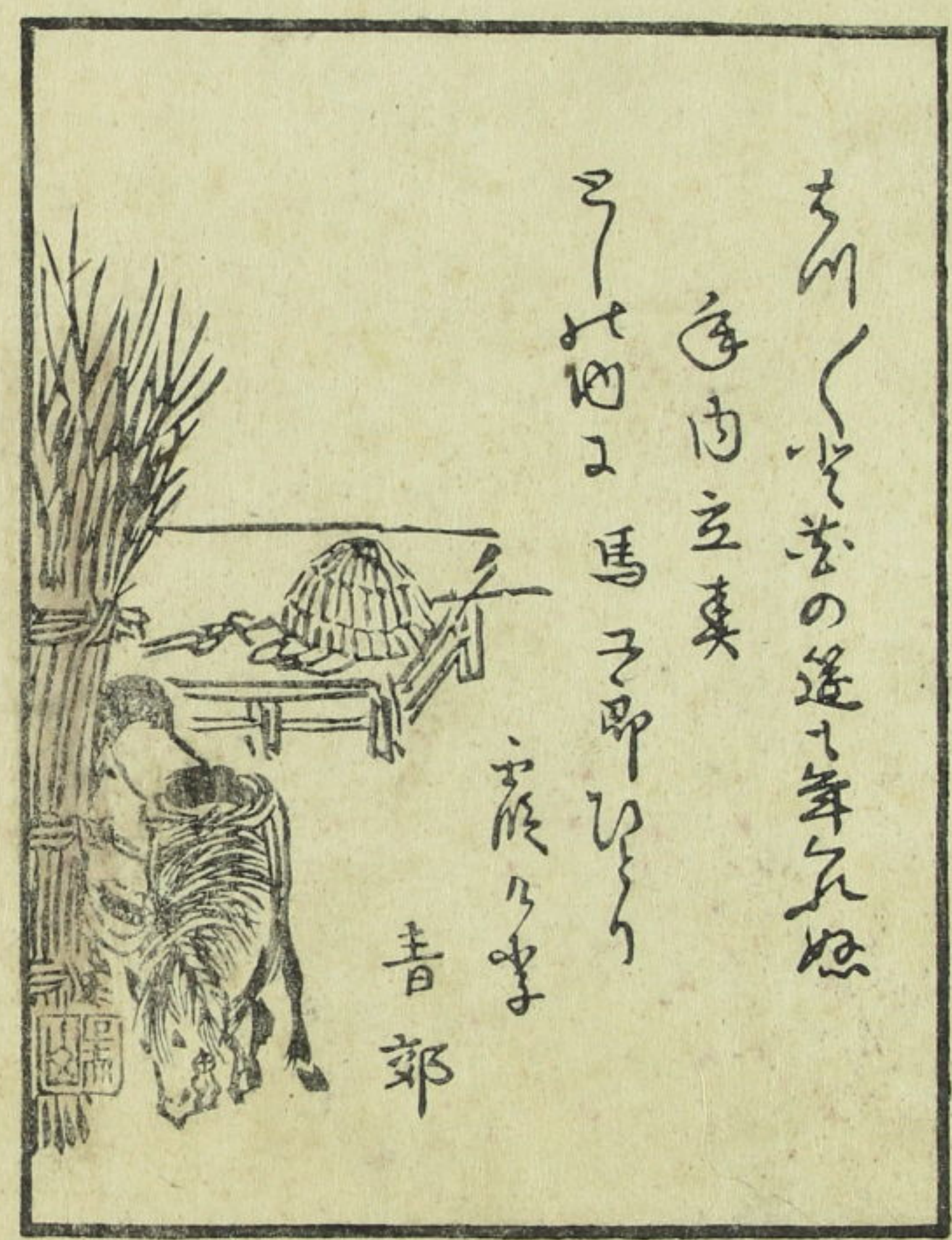
いと花も花とく言 花とく言 桂也

くくくくくくくくくくくく 柳好

花も花の花の花とく言 爽嘯

くくくくくくくくくくくく 宗瑞

一忘りの所を以て
 川の星音高し一作瓦
 け年し着てはいまは師走に
 一の園をぬかす白桂
 雪は目と鳥しゆくやの布
 互桂



大川く雪の邊に年久
 年内立奏
 一これゆ馬子即ひり

音郭

餅つ手や志のうきよはる雪 希声
 雪霰よから舞く枝葉の栄け 花昔
 夜一かゆは使し急よ衣とり 法調
 ぬくぬくは纏もちめて師走に 樽枝
 海老の背とくく蹴るは一板 糸水
 梅とえよきのちくはちの奥 桃枝
 雪は人波や除かれ福寿州 青眼
 雪の隙よ落はくる列 竹野 午山
 雪くくは履をありし條のよ 赤麻
 年け品の咲白や整つたの足 七翠
 末廣の雪をたけや大世日 文英
 葉経れ大けやくの一里塚 赤廷

かしら小判海吉師之代 尾谷
 有まぬや喜詩川中に梅の枝 五葉
 昔季能くを布一立也この取 家述
 来るまぬ故の気て子一梅は花 九阜
 水色や蝶掃志ぬ花の色 古陵
 垣わも尾緒借るや年の市 三扇
 道いよ川又堂たり言は市 更互
 赤くあるはま管を一鬼中い 巴蝶
 川よりけ屋とらへる牛馬賣 寸銘
 乙雪吹山のりや一也取取子 梅周
 子代くく蒼け市やま所賣 嘯風
 梅の火とまをとり川くこの取 千鳥

昔季のや管のまのま連 桃林
 藤つるや氏の毫れ数子入り 雨考
 海山と持て房もやうけ市 甫丈
 枇杷よりりるる言か大世の 巴十
 道草の取やふく一年の取 梅舟
 代よりや雪のみ川きたる時 春雨
 す掃や詠治屋の人の必此身 免流
 蟬をきや何一物子比笑ひ身 桃枝
 さと泊のふりそんくけら幾 玉芳
 海へ鳴て喜ま川梅のりい魚 山貢
 町中に果の香もあり身飾 琳下
 くよまなく磨乃軸も枝は 砂雪

江のほとりなる生海流のやぶ 南江

月之影をぬんと町や大世日 鱗也

道の傍をゆく一層みぎさ心 高也

明は又暗いあらしうは曇り 私因

川より舟巨魁の山はむん 常流

吾眼の影は漕あり海乃波 長谷

たし和するやうは浅所 文花

成と妻の境より川や松をり 輕舟

新りきき春のあはれは海 芦江

二月の梅のあけはれは心 魚也

さくきの月夜や海の世を 魚川

挽的も隣ありやうのくれ 木童

年也立妻

喉の底も舌も暖日やうは内 溪也

妻は蓋をよきに川海 周也

妻真 唐虫の好玉耳
交に返か

花より梅切より白ひん 日光 文羅

簾けく校うしんは梅の肌 品磨

大呂

あひらけられ用意も

いつの市巻せぬ
高き糸にうけりて

解た子運ふ本はや要さし 因也

海のおれりては草賊布 木淵

原磨
巧
里
赫
乃青



本自園



各詠

月日は百代も色香
くさくさりふやう
雨の流也とわさけい
ひゆゆく釣の脚は
うら尾もつらうは光陰
夫れあそくつらう六枚
眉もかふひさく川
波若ささやに川る此
沙汰もたさささの梅
さささうあぬ驛路を
うらうらうら

日本橋 和川

ゆきゆきの星をうー日本橋 寸葉

和川や夜もささうやーの流 其川

川と名 津奈川

三軒たあう茶の友やーとすれ 吉澤

久川やゆの瀬よりた航け航 巨考

おと名 戸止

川年も経ヶ谷よりそら川うら 楚玉

聖ハ世此江戸にう初をれーの梅 杏里

藤沢 大塚

夢年のるも城見色をやーは果 午侯

大塚たあうーち安ー年の夜 比明

小田原 箱根

小田原の船も若くは若女 里徑

法橋の名は越中一子の雲 紫園

三ノ谷 沼津

曆天の巻櫃や雪一用色 芥水

ゆらぐや浪はさるや年の元 松潤

系 千原

旗つるや軍士と去向の雪の雲 仙州

若くは立派もちう一途の雲 巴東

蒲原 出井

けしや別色の神もいらぬ 歌別

金糸ねぬ目所くちの元ぬ 蓮葉

おきほ 江尻

志の急な除ねとあふぬ 無津波 文羅

海波もめぐる酒名も巴川 伽山

府中 まりこ

弁細工の市場も核すも 古淵

梅のうねりも菊子のうねり 乙武

宗徳 友喜

柳のうねりもつる一年の青 巴東

喉のうねりも舌のうねりも 千里

清田 久能谷

海波も友に流るや大井川 八十九

菊川に若き娘もあつるの雲 和泉

日坂 けり川

日北郷に遠志を在り年の坂 笹長

けり川や鬼もちけり坂 市楓

袋井 見附

けり川を石を以てのメロウ 何調

事善も見つけよ一子梅 家律

浪川 赤坂

浪川の赤坂んやうに色 家琺

赤坂に浪越を以て大井日 凡光

あし井 志了

けり川よりけり川 梅雨

白浪野や雲の梅より元年 寸州

けり川 吉田

けり川の改定浪事やうに境 吟長

梅の火とくわんからやうの市 笹長

法池 赤坂

梅の香も水の中とあやうき年 楓又

坂のけり川を以て梅の葉 吳山

浪川 岩橋

梅つるや汁粉を以て赤坂 桂路

墨の紅は葉の子を以てやうに 里山

地理附 かる見

けり川や雲を以て初冬の多用を 家喬

けり川を以て梅の葉を以て 徐来

之也 書名

くけんの樹もくろくやえ海 林卿

まゆぐに人とよむや幸の原 菊羽

四口市 石巻町

川くわ杖つぎ坂北乃とき 藤原

息号尔懐念くくし海口とき 芦帆

石巻 龜山

廊くわ俵くろくくくく坂 杏雨

龜山や幸原あつら幸の原 呂長

岡 坂の下

龜拂くろくも地原やゆの原 花長

深夜の巨海くわ龍麻北山くろく 百株

土山 坂口

土山や一多くろくくくくの原 瑞芝

水口くわけくろくくくく幸原也 杉史

石巻 幸原

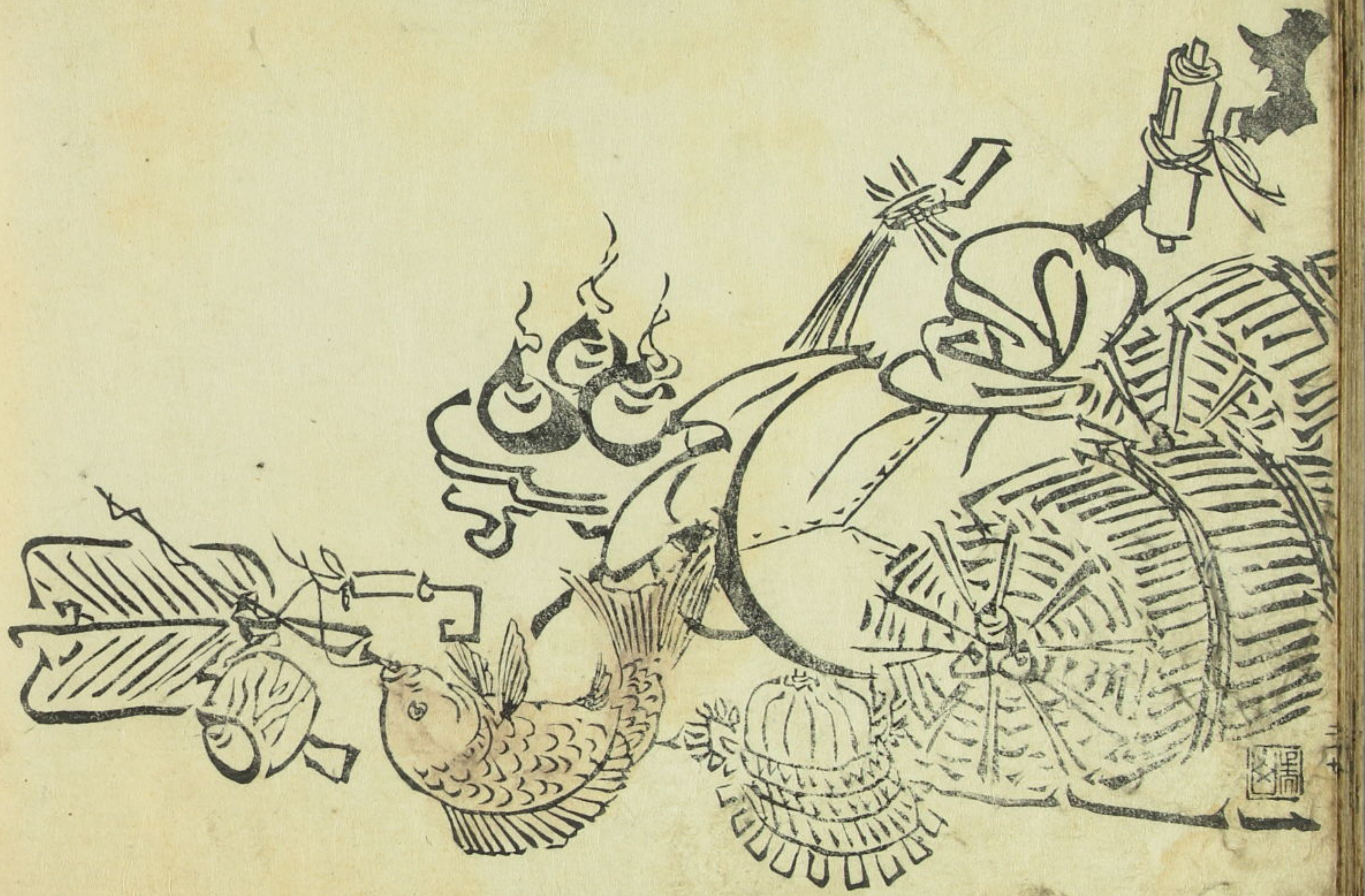
九巻の幸くわくくくく石巻川 午長

麻搦くろくく粉くわ白蛇くわ髪 歌長

大津 京

聖の花の山よ大津北邊任家 文賀

赤ま川や京くろくくへくく年一板 桃我



金瓶梅詞話の山と近き
 妻の用事とより
 あり

子孫も妻一とくや大子孫
 己白

彼とる人一番書も
 増してさや一板の名物故
 懐一玉

ちろ子も星と野物や大世
 涼花

倍ハ枚丈の較よあさ
 あせれは懐の事を
 定み

節采も志ハ懐物や一
 夜風

流ハ通用の自互と稱し
 象の字とららし
 名はあやちりし

その目れ懐も懐まうと平乃梅
 鯉尺

珠の夜光此多みかめし
下りての雲路の白はし
あらし

玉川よかきわぬれ 子の辰 第鳥

樞を空の福西と指す
しらゆらぎとさくさく

煉掃や庭をく 樞の階を指す 李尉

暮陽の里に雪とほく
紙にれおきう標の香
をわりのうしあき

かえり暮る酒は控るやと一云 巴流

空に謝意運る戒も空
るあらしあきとより
こころのうしあき
世とあらしあき

美代の名やまよとて 海山 三貫

外に世帯をさくさく
味をたれ平作よけし

川流や雪の負れし 秤 里路

福のふれ鐘あらし
ちる代名たりけ
たらし

福しぬせれ志川をわすの真 寺長

六 語 立 身 四 好
七 言 假 名 詩

讀好書

よましくばよむれば禁に
自に日くぬきしを
一字の思共懐かし
も念ふ如くはくを
阿吟雨

